

エクメネの最果てへ —サハ共和国 冬の旅— 【第10回】岡本 健裕



馬、馬、ウマですよウマ！…すみません冒頭から取り乱してしまいました。皆さんは馬と聞いたら何を想像なさいますか。日高の牧場でしょうか、ロバのパン屋でしょうか、服部緑地の乗馬センターでしょうか。それとも松風ですか、黒王号ですか。ん、仁川？府中？まあ、趣味は人それぞれであります。

いずれにしても、日本人にとって、馬は乗用や牽引用の動物として真っ先に思い浮かぶのが普通ではないでしょうか。しかしヤクート人にとっては違います。馬といえば栄養源なのです。それはもう、もりもり食べます。というか主食です、馬は。エキゾチックでしょ。

およそ食べ物のことほど、誰にも明解なカルチャーショックを喚起するものもないでしょう。日本人は食事全般をごく自然に「ごはん」と呼びますね。メシにしよう、と言ったその口でスパゲティを食べても平然としています。それほどまでに、我々の食卓は根本からコメ(=飯)を心柱にしている、あまりにも完成しきっているので、ほかの食品の付け入る隙は全くありません。主食ってすごい！

ヤクート人にとって、このコメに相当するところのがつつり住みついているのが馬なんです。もっとも、彼らが食事全般を「馬」とまで呼んでいるかどうかは知りません。

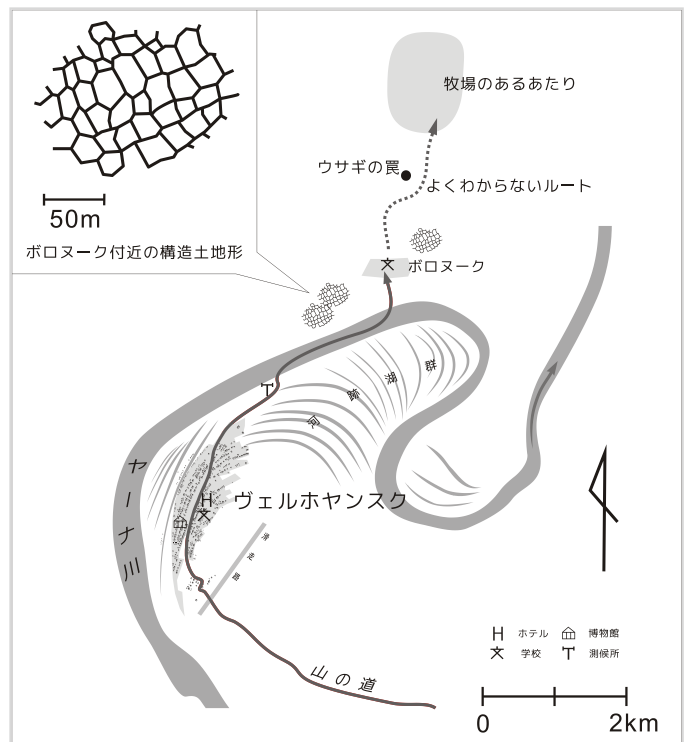
さて、私たち一行は、ヴェルホヤンスクの町から凍ったヤーナ川を車で渡ってボロヌークにやって来たところですが(連載第9回参照)、実はドライブの本当の目的地はさらに先にある牧場なのです。ヤクート人のお腹を充たし、心

を満たす食べ物の生産現場の最前線を、とくと見せてもらいましょう。

熟練ドライバー、アナトリーさんの運転するウアズ(VA3)は、ボロヌークを抜けると変な路面を走り始めました。何となく道のように、あまり道らしくない、はっきりしない轍です。おそらくは冬にだけ使える自由なルートなのでしょう。どう舵を切れば、どこへ行けるのか、全てはアナトリーさん次第です。夏はどうなっているのでしょうか。この辺りの衛星写真をよく見ると、地面が奇妙な多角形のパターンをなしていることに気づきます。これは構造土といって、地面が凍ったり融けたりしているうちに地表面に規則的な凹凸が生じた地形です。何か思い出しませんか、凍ったり融けたりしてできる地形といえば…そう、構造土は周氷河地形(連載第5回参照)の一種なんですね。今は雪が被っていて見えませんが、夏ならばこの構造土の風景が見事に広がっているはずですよ。

車は疎林に突入しました。相変わらず、道なのかどうかよくわからない、怪しい路面ですが、気にせずぐいぐい走ります。さすがウアズ、踏破性能にかけては世界的に評価の高い四輪駆動車だけのことはあります。ふと、林の中、達人ニコライさんの合図で車が停まりました。全員、車を降りて藪の中へと案内されます。牧場へ行く前に何か見せてくれるようです。

それは畏でした。(と書くとは何やら意味深ですが、)ウサギ捕り用の畏です。仕組みは単純で、1本の丸太をシーソーのように用います。丸太の支点を偏らせておいて、軽い方の一端には針金の輪っかをつけます。その一端を地面





ウサギ罾

近くまで引き寄せ、外れやすいようにほかの木にひっかけます。これだけ。

針金の輪っかにウサギの脚がかかると、丸太が外れてシーソーのバランスが戻り、一方で針金はキリキリ締まり、あわれなウサギはあえなく宙吊りとなります。やがて絶命したウサギは、その場であつという間に冷凍

肉に。なるほど一、よくできています。でも、そんなにうまくいくんでしょうか。ニコライさんの説明を聞いているうちに、私の頭の中にはだんだん「待ちぼうけ※」のメロディが流れてきて水を差すんですが。だってこれ、歌にある「兎ぶつかれ木の根っこ」、の構図そのものですよ？

ニコライさんによると、ここはウサギの通り道なので大丈夫、獲物はちゃんとかかるそうです。確かに 1 羽 2 羽くらいなら、わかります。ホテルの食事にもウサギ料理がありましたしね。でも、同じ道を使い続けて捕まってしまうほど、ウサギも間抜けじゃないような気がしますけど。ほら、罾の横を素通りした足跡があちこちに…。しかし、本当にウサギは間抜けなものでした。後になって、私は自分の浅はかさを決定的に思い知る事となります。

疎林を抜けると、大きく視界が開けました。なだらかな丘陵を遠景に、薄く雪をかぶった地面が漠と広がっています。これが牧場です。車を降りると、数頭の馬が立っているのが目に飛び込んできました。初めて見る、ヤクート馬の姿です。馬たちは皆、何やら口をもぐもぐさせています。雪の



牧場と異様に丸い馬たち

下の草をほじくって食べているのです。それにしてもどうですか、このまんまるに太った短足の肉体は。彼らを正面から見ると、その特異さがさらに際立ちます。およそ馬とは思えない、コッペパンのようにつぶれた幅広の胴体の断面形！食べるための馬とは、こういうものなのか…。

遠くから馬に乗った人影が一騎、近づいてきました。馬上の人はニコライさんの息子さんです。おや、乗用の馬は見た目が違いますね。ちょっとスマートです。まあ、ヤクート馬である以上、ずんぐり短足なのはもう DNA で決まっていることみたいですけど。それにしても周りの異様にまるっこい馬達は、やっぱり食用という、それなりの意図でもって太らされた結果なのでしょう。

ニコライさんが、馬に乗ってみたいか、と仰いました。えっ私、馬に乗るの初めてなんですけど、どうしよう、…乗ってみたいです。というわけで 1 秒ほど迷いましたが、乗りました。数メートル移動しただけですけどね。たったそれだけでも、楽しい！もう、勝手にニコニコと顔がほころんできます。生き物の背中に揺られるって、イイ。理屈抜きにい



ヤクート馬に乗る

いすね！いつか、サハの大地を、馬を駆って自由に旅できたら素敵だな。

この寒極でも、自力で餌を見つけて生きていられるヤクート馬たち。立っているだけで、もわーんと湯気が立ち上がっています。すごい生命力。そんなヤクート馬の背にまた

がって、吹きさらしの環境で馬追いの仕事をする人間もまた、凄まじい適応力です。みんな、どうしてそんなに強いんですか。

ニコライさんによると、この辺りの人は、気温マイナス 50℃以下でないと、寒いとは言わないんだそうです。今日みたいな 30℃程度の日には、暖かいんですけど。はっとしました。ニコライさんの言葉に驚いたのじゃありません。私もごく自然に、マイナス 30℃を暖かいと思ったことに気づいたのです。

以前からなんとなく感じてはいましたが、これで確信しました。「体感温度のインフレ」ってやつは存在するし、それ



ニコライさんの立派なユルタ

は普遍的現象なんだと。どういうことか説明しましょう。私は特に寒さに強い人間ではありません。むしろ、気温プラス 5℃程度で震えているような軟弱者です。でも、冬の北海道を野宿しながら旅したときは、その間だけ、マイナス 10℃までは暖かく感じるようになりました(初めは信じられなくて、温度計が壊れていると思ったものです)。この現象を、私は勝手に体感温度のインフレと名づけています。もっとうと寒いところへ行ってみても、そのたびに、インフレを体験しました。名だたる寒冷地の住人はよく、ここでは〇度までは寒いとは言わない、なんて言いますが、その通りですね。その場で同じ気温を共有しているうちに、不思議なくらいあっさりと思うようになってしまふ。それでもずっと、半信半疑だったんですが、今回はとうとう、世界の寒極までやってきて、やっぱり同じ現象を経験してしまいました。これはもう、地球上で人の定住しているところ、全てがそういうものなのかもしれません。ちょっと立ち寄っただけの旅行者でさえも、1 日、2 日もあれば、寒さの感覚が現地仕様にスライドしてしまう。もしそうだったら、最果ての町を探し求める旅は、温度感覚に関する限り、無駄なことなのでしょうか。ちょっとさびしいな。

「50℃以下になると、吐く息が凍るよ。」とニコライさんは言います。「冬はそれくらいが普通なんだ。けど、最近は暖かい日があるね。以前は 1 月に 30℃台なんて考えられなかった。これは 3 月の気温だよ。」ああ、なんて残念。息が凍るところ、見たかったなあ。天を恨んでも仕方ないですが、どうして自分の滞在日程に限って例外的に暖かい日とぶつかってしまうのでしょうか。でもニコライさんは全然残念そうじゃありません。「そりゃ、寒いよりも暖かい方がいいよ。」ごもっとも。

牧場の片隅に、ニコライさんの所有するヤクート式ユルタ (IOPTA) が建っています。博物館(連載第 7 回参照)で見学したのと同じ、チロルチョコの形状をした、厚い土壁の、「動かせない移動式住居」です。中を見せてもらいました。コップや食器がテーブルに載っていて、はっきりと生活感があります。たまに、このユルタに泊まり込みで仕事をする

こともあるのだとか。冬でも暖炉に火を焚くと十分暖かいそうです。寒極の人々の暮らしには、ヴェルホヤンスクという「町」の部分のほかに、こういうプリミティブな単位もあるのです。そしてそれらを全部まとめて支えているのが、馬。まぎれもなく、馬です。極限の地であるこのヤーナ川のほとりで、命を繋ぐ栄養源として、主食として、ほかにどんな生き物が代わりを務められるでしょう。馬がいなくては、人類の最果ては、もっとうと後退していたに違いないのです。

お土産だ、と言って、ニコライさんが何か白い毛むくじゃらの棒を差し出しました。受け取ってよく見ると、爪がついています。ウサギの後ろ脚でした。テーブル掃除に使うとちょうどいいよとニコライさんは言いますが、さて…。そんなわけで、世界で一番寒い大地を元気に蹴っていたウサギさんの脚が今、我が家にあります。ウサギ氏も、まさか自分の脚が遠く日本へ渡ることになるなんて、生前は思ってもみなかったことでしょうね。なんだかもったいないので、まだテーブル掃除には使っていません。



ウサギの脚

もう、外は暗くなり始めてきました。さすがは北極圏、朝と昼と夕方がいっぺんに終わりかけています。そろそろ、ヴェルホヤンスクへ戻りましょうか。そういえば、いまいははっきりしない道を通ってきたせいで、現在いる牧場の位置がどのあたりなのか、正確にイメージできません。

アナトリーさんのウアズは、元来た経路と少し違うところを走り始めました。冬の道は海のように自由です。どこをどう進んでも目的地へたどり着けるくらい、アナトリーさんはこのあたりの地理を庭のように熟知しているのでしょうか。でも、これで部外者には道が全然わからなくなってしまいました。

そんな道中、疎林の中で急にウアズが止まりました。エンジンがかかりません。故障みたいです。(つづく)

※作曲: 山田耕筰 作詞: 北原白秋

※掲載写真は北海道新聞大能記者による撮影(ウサギの脚除く)